

近世カンボジア王都ロンヴェークの構造と対外貿易

佐藤由似

I はじめに

9世紀初頭に勃興し、アンコール・ワットやアンコール・トムなどの壮麗な石造建造物群を遺したアンコール王朝は、15世紀前半にアユタヤの侵略により陥落したと言われる。一方、アンコール陥落後の近世カンボジア（15世紀～1863年）については、遺跡数、碑文などの文字史料数の少なさに加え、繁栄したアンコール期とは対照的に暗黒の時代と捉えられていた（Chandler 1983）ため、既往研究が限定的であるのが現状である。この「暗黒の時代」という概念自体が、近代歴史学や植民地支配の抑圧によって生じた一面もあると考えられる。アンコール期以降について叙述した唯一の年代記である『カンボジア王朝年代記』（Garnier1871；Garnier1872；Khin1988；Leclère1914；Mak1984；Moura1883）は、同時代史料ではなく、19世紀以降に編纂されたものであり、この年代記の記述内容に対しては既に歴史学者らによりその信憑性が疑問視されてきているところである（Mikaelian2013；Vickery1977a；北川1998）。このため、当該期に関する文献史料研究に限界があるなか、近世カンボジアの物質文化に対するアプローチとして、美術史研究が先行して進行していたが（Boisselier1965；Giteau1966）、近年になりようやく考古学研究が注目されている。

ロンヴェークは古くから近世カンボジアの都として認識されていたにもかかわらず、一度も考古学調査が実施されることがなかった遺跡である。しかし、2010年に初めて現地を踏査した際に、土壘や堀などの遺構が良好な状態で残っていることが判明し、ロンヴェークにおける考古学的手法による研究が近世カンボジア史解明の一助となることが期待された。本稿では、考古学調査で得られた成果に基づき、ロンヴェークの構造を検討する。またその出土遺物の分析から、暗黒の時代とされた当時のカンボジアによる経済活動の一端を考察する。

II アンコールからの遷都

1 スレイ・サントー

王朝年代記によれば、15世紀前半にアユタヤがアンコールを侵略して以降、カンボジア

の王と宫廷はトンレサップ湖の南へと移動したといわれている（図1）。スレイ・サントー、プノン・ペン、ポーサット、バリボーと転々としたのち、1529年にロンヴェークに遷都、1594年のアユタヤによる攻撃後、1620年になりロンヴェーク近郊のウドンに遷都し、ここでフランスによる植民地化が開始する19世紀中頃まで所在したものとみられる。ヴィックリーは、アンコールから王都が南へと移動した理由について、経済活動を挙げている。すなわち、内陸のアンコールよりも交易に適した土地を求め、トンレサップ川、メコン川周辺の河川港となりうる地域を移住先とした可能性を指摘している（Vickery1977a）。折しも、14世紀後半以降は東南アジアでヨーロッパやアジア各国からの貿易活動が活発化し、いわゆる交易の時代へと突入する時代にあたる。カンボジア王は地理的に交易に有利な土地を選択していたと推察される。アンコールから最初に移転したスレイ・サントーは、明朝と独自の外交関係をすでに築いていたとされているトゥオル・バサンが中心地であった（Vickery1977a, 1977b, 2004; Wade2005; 2011; Wolters1966）。明實錄には、カンボジア（真臘）に関する記録が35件残されている。このうち、カンボジアのバサン（巴山）王が使者を送った記録が2件残されている（中央研究院歴史語言研究所漢籍電子文献）。

洪武4（1371）年11月7日「真臘國巴山王忽兒那遣其臣柰亦吉郎等進表貢方物賀明年正旦賜其王大統曆并織金文綺及來使紗羅文綺有差」（太祖高皇帝實錄卷之六十九）

洪武6（1373）年10月22日「庚寅真臘國巴山王忽兒那遣其臣柰亦吉郎等暹羅斛國遣昭委直

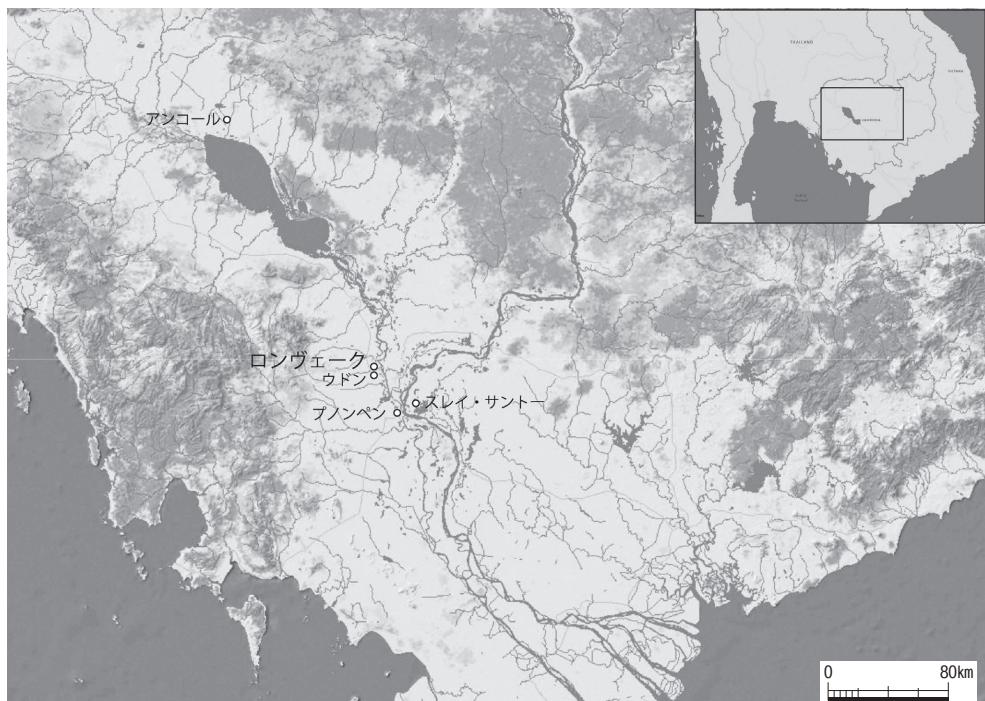


図1 近世カンボジア王都位置図

等各進表貢方物命皆賜明年大統曆及織金文綺紗羅使臣各賜綺羅及靴轍」（太祖高皇帝實錄卷之八十五）

ここで重要なのが、真臘の中心地であったアンコールとは別に、巴山は中国に独自の使者を送ることができるほどの勢力を有していた点である。このため、アンコール陥落後に王がまずアユタヤの侵略の手から逃れてきたのが、バサンの地であったものとみられている。具体的にスレイ・サントー地域のどこにバサンの地があったかについては、様々な説があるものの、スレイ・サントー地域はメコン川東岸に位置した貿易に有利な土地であり、メコン水系を活用しベトナムの諸民族との交渉も優位に行うことができる地の利を有していた。スレイ・サントーの中心地であるバサンについては、今後の考古学調査によって、その位置、規模、年代などを明らかにする必要があると思われる。

2 ロンヴェーク

一方、メコン川東岸のスレイ・サントーに対して、トンレサップ川西岸地域に築かれたのがロンヴェーク＝ウドン地域である。16-17世紀にかけて、ロンヴェークはカンボジアで最も重要な商業・政治・宗教の中心地となった（Khin1988；Mak1984；Mikaelian2009a；Vickery1977a）。16世紀初頭、アン・チャン（在位 1516/7-1566年）はアユタヤから帰国し、篡奪者であるスダチ・コーンを討ち、プロン・ペンから遷都し、約40km上流に新都を建設した（Khin1988；北川1998；Mikaelian2016；Vickery1977a）。王朝年代記によれば、ロンヴェークの主要なヴィハーラと王宮は1530年ごろに建設されたと述べているが、ロンヴェーク内にはアンコール期以前の7世紀にさかのぼる碑文（Cœdès1942：115-118 [K.137]；Cœdès 1942：119-120 [K.432]；Cœdès 1954：284-286 [K.136]，北川 2006）やドヴァーラヴァティ一期の彫像（Revire2016）、アンコール期とみられる遺構（北川2006）などが確認されており、16世紀以前にロンヴェークの地が既に利用されていたことを示している。

1594年のアユタヤの侵攻により陥落するまでの約60年以上首都であったとされるロンヴェークには、豊富な考古資料が残されている。にもかかわらず、過去には考古学調査が行われたことがない未解明の遺跡であった。筆者らはカンボジアの文化芸術省との共同研究としてロンヴェークの調査を開始した（奈文研2015）。正確な地図や地形図もない状態であったため、まずロンヴェークの全体像を把握することを目標とした。その結果、ロンヴェークはアンコール・トムに匹敵するような大規模な土壘と堀が良好な状態で現存すること、一方でアンコール遺跡群とは違い、ロンヴェーク域内には大規模な石造建造物が存在しないことが判明した。現地踏査において、ロンヴェークでは相当量の遺物を表採することができた。しかしながら、当時の建造物が少ない分、遺跡の全容を把握するにはロンヴェークの構造と地形的特徴をまず正確に理解することが必要であった。

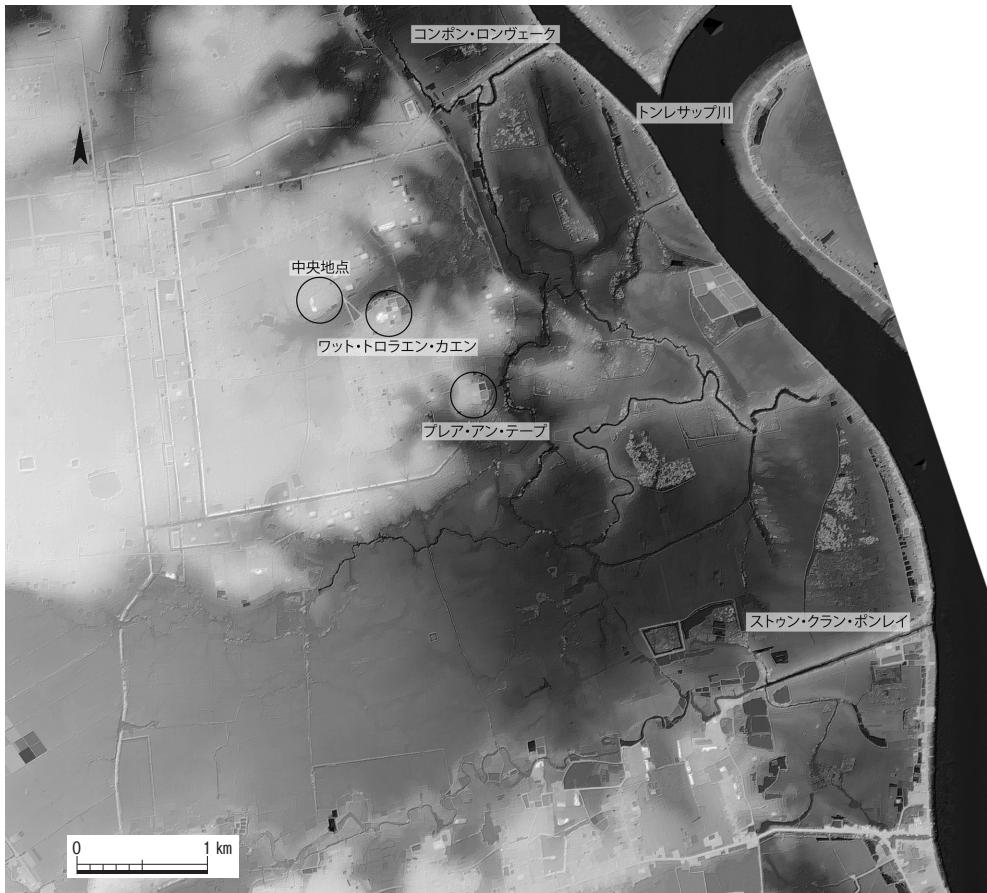


図2 ロンヴェーク地形図

III ロンヴェークの構造

1 土 墓

踏査によって、ロンヴェークは約7平方キロメートルの面積を有することが判明した。この広大な領域の地形を把握するため、カンボジア文化芸術省、フリンダース大学と当時アンコール地域での測量調査で成果を上げていたCambodian Archaeological Lidar Initiative (CALI) と協同で2015年にLidar測量を実施した。対象地域は、ロンヴェークとその南方約7kmに位置する17世紀以降の王都ウドン地域とした。Lidar調査で得られた成果を解析し、地形図画像（図2）と概略的な遺構分布図（図3）を作成した。この結果、ロンヴェークは南北約2.8km、東西約2.6kmを測る方形の土壘が、東を除く三方を囲い、西側と北側の土壘は三重となることが判明した。ここでは、最も内側の土壘から第1土壘、第2土壘、第3土壘と呼ぶ。土壘の高さは地点によって差異はあるが、約8m~10m、幅

は約25mでそれぞれ土壘の外側に並行して同じ幅約25mの堀が走る。東側に土壘は存在せず、台地の東縁でトシレサップ川の氾濫原に開口する形となる。

南辺土壘には、1か所村道により切り取られた箇所があり、良好な状態で断面を観察できる。断面の状態から、

土壘はレンガやラテライトを使用することなく、粘土質の土と砂質土を互層に積み重ねた構造であることが読み取ることができる。また、これらの土壘と堀の方位軸を見てみると、西に12度ほど傾いている。地形画像を観察すると、最大限土壘の長さを取ることができるよう、ロンヴェークの立地するリアス式の台地の傾きにうまく合わせて、土壘を構築していることが判明した。

第1土壘から第2土壘にかけての南西隅には東西約480m、南北約200mの出隅状に張り出した区画が存在する。さらにLidarによる調査で、第2土壘西辺に5か所、北辺に3か所の砦状の張り出し部が形成されていることが見て取れる。この砦状の張り出し部は第2土壘にのみ存在する。また図4にみるように、最も内側の第一土壘のすぐ外側に小山状のマウンド、その延長線上に砦状の張り出しが形成されている。この張り出し部自体は平坦に造り出され、一重の堀に囲まれているものの、地表面からの比高差がさほどあるわけではない。この第2土壘の砦状施設と第1土壘とを直線状に結ぶ位置にそれぞれマウンドが存在している。



図3 ロンヴェーク遺構分布図



図4 ロンヴェーク西辺土壘

そして、その延長線上にある第1土壘には切れ目があり、内外を往来することが可能になっている。これらのことからこの砦状遺構はロンヴェークの防衛上の要となる施設であったことが想定される。

また、現在見るロンヴェークには、アンコール・トムの城門のように明確な出入口施設が存在しない。19世紀にロンヴェークを訪れたエイモニエによれば、最も内側の西側土壘には3か所の門が設けられており、このうち一つのみが内外を往来できるようになっていたと記述している (Aymonier1900)。しかし、エイモニエの指摘する最も内側にあたる西側第1土壘には現在3か所以上の土壘の切れ目が存在しているうえ、北側、南側第1土壘にもそれぞれ切れ目が存在している。これら土壘にみられる切れ目のうち、どれが人の往来を許す出入口施設であったかについては慎重な検討が必要である。

2 ロンヴェークの水利

Lidar画像ではロンヴェーク城壁内にはアンコール・トムのようなため池や運河網は見当たらないが、ロンヴェークの台地下を細い流路が張り巡らされているのを確認することができる。ここでいくつか注目すべき箇所がある。ロンヴェーク北東隅では、トンレサップ川と水路との合流地点から南西方向に約1kmは明瞭な直線的な流れとなっている。その途中で袋状に湾曲する箇所が存在するが、おそらくこの流路は人工的に改変されたものと考えられる。

この水路とトンレサップ川との合流地点周辺の集落で聞き取り調査をおこなったところ、この合流地点は「コンボン・ロンヴェーク」つまり「ロンヴェークの港」と呼ばれ、ロンヴェークへ続く直線的な水路は「プレーク・ロンヴェーク」すなわち「ロンヴェーク水路」と呼ばれていることが判明した。いつからこのように呼ばれていたかは不明であるが、トンレサップ川を遡上した貿易船が当地点周辺に停泊し、運んできた交易品や物資を小舟に移し、水路を使ってロンヴェークまで運んでいたのではないかと推測される。また、ロンヴェーク台地下の低地部は、雨季には水位が上昇し、台地上端にまで到達するほどの水位となる。そのため、雨季には小舟で自由に航行できたと考えられる。

3 上座部佛教寺院

ロンヴェーク域内には複数の寺院が存在する。その全てが上座部佛教寺院で、現在までのところ、約30か所存在することが判明している。これらの寺院は大きく分けて2種類に分類される。一つは伽藍を形成するタイプの上座部佛教寺院で、本堂・僧院・講堂・ストゥーパ・池が伽藍内に配置されるのが一般的である。ロンヴェーク域内で最も重要視され (北川2006)、中心寺院としての役割を担っているのが「四面仏の寺」という意味を持つワ

ット・トロラエン・カエンで、ロンヴェーク域内のはば中央に位置する。現在の本堂には、後世に造像された東西南北の四方を向く釈迦如来立像があるが、その足元に当初仏である四面仏の砂岩製の足材がそれぞれ四面に残されている。このワット・トロラエン・カエンに並んで重要とされるのがロンヴェーク南東隅にあるワット・プレア・アン・テープであり、ロンヴェーク期から続く寺院である（北川1998）。

もう一つが、いわゆるテラス寺院と呼ばれるタイプである。アンコール遺跡群のアンコール・トム内にも多く確認できるが、伽藍を形成せずに、本尊を祀ったヴィハーラとその手前に平面長方形の簡便なテラス状の張り出し部を造り、これらをシーマ石（結界石）と呼ばれる二石一組の装飾石で寺域を区画するものである。ロンヴェーク内のテラス寺院はその殆どがマウンドの上に造営されている。これらテラス寺院は、ワット・トロラエン・カエンの東側や、南辺土壘周辺に多い。

4 都市プランの検討

アンコール遺跡群のうち、ジャヤヴァルマン7世が造営したアンコール・トムは一辺3kmのほぼ正方形を呈した土壘と堀に囲まれた都である。城壁内には東西南北に道が計画的に配置され、各出入り口には砂岩造の門が造営されている。城壁の中央部には、バイヨン寺院が聳え、その北西には王宮が位置する。また、城壁内には道路網に沿って運河が巡っていたことが最近の研究で明らかになっている（Gaucher2004）。緻密な計画のもとに築き上げられた都であると言えよう。

一方、アンコール陥落から約100年後に造営されたとされるロンヴェークは、アンコール・トムと同じく土壘と堀に囲まれている点は共通である。しかしながら、ロンヴェーク城壁内には明瞭な道路網は持たず、先述の通りアンコール・トムのような明確な城門等の開口した出入口がない。水利施設に関しては、アンコール・トムのような城壁内での運河等の水路網は見当たらず、城壁外の台地下に小川状の水路網が張り巡らされているのが特徴である。また、アンコール・トムと比べて城壁内のため池の施設が圧倒的に少ない。アンコール・トムとロンヴェークでは構造的に異なる施設も多いようである。

一方、別の観点から見ると、ロンヴェークのはば中央にはワット・トロラエン・カエンが位置し、四面仏を有しており、四面仏を特徴とするバイヨンを象徴的に継承しているという見方もできる。トンプソンは、16世紀以降の統治者は、ジャヤヴァルマン7世の四面仏の図像を上座部仏教信仰に沿って改変し、アンコール期の秩序を回復する意図を持っていたことを指摘している（Thompson2000）。侵略や内戦を経て、当時の王が王権を正当化するために、意図的にアンコール期の概念を復興させた可能性をロンヴェークでも検討する必要があると考えられる。アンコール・トムでは中心寺院バイヨンの北西に、王宮が位

置する。ロンヴェークでは、中心寺院のワット・トロラエン・カエンから低地帯を挟んだ北西側の微高地には開けた土地が存在する。その抜群の立地環境から、調査開始当初よりロンヴェーク域内において重要な地点であることが見込まれていたが、残念なことに当該地点には2012年頃にレンガ工場が建設され、現在に至るまで退去することなく操業を続けている。ロンヴェークの都市構造を把握するうえでも、当該地点の調査は重要であると考え、現地踏査をおこなった結果、良好な遺物を表採することができた。

IV ロンヴェークにおける考古学調査

1 ロンヴェーク中央地点

ロンヴェーク中央地点は、中心寺院ワット・トロラエン・カエンの北西に位置する微高地を指す(図2)。レンガ工場の敷地内であるため、考古学的な調査範囲は限られるものの、2018年の調査において、約104m²のトレンチ調査をおこなうことができた。自然堆積層の上にある文化層である第3層の遺構として小型炉跡1基、小型の柱穴3基を検出したが、これらの遺構から年代比定可能な遺物は検出されていない。また土器や陶磁器をはじめ動物骨等が黒色の堆積層から大量に出土した。第1層と第2層からは明瞭な遺構は検出されず、表土層と第1層の一部は現代のレンガ工場による攪乱を受けている。

トレンチから出土した陶磁器・土器の総点数は10,624点(破片数。同一個体は1点として換算)にのぼり、このうち貿易陶磁器は447点、陶器120点、土器10,057点が出土している。貿易陶磁器に関しては、第1層から42点、第2層から44点、第3層から361点を検出した。とりわけ第2層と第3層からは、青花では景德鎮産の連子碗や葵筍底の碗等に代表される16世紀初頭から中頃にかけての一群、大明年造銘や饅頭心碗等を含んだ16世紀後半から17世紀前半にかけての一群が観察された。白磁では碗・皿が最も多かった。第3層からは景德鎮産の上質な白磁の特殊品も確認された(図5-1)。口縁は玉縁状に作られ、外面には

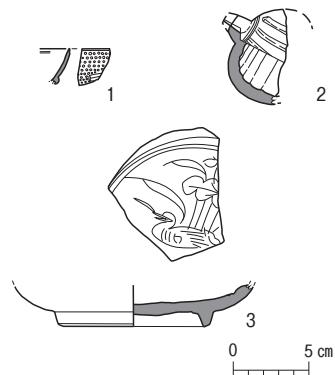


図5 ロンヴェーク中央地点出土遺物

ドット状の細かな貼付文が丁寧に施され、下部には脚状の突起が取り付く。1点の破片のみの出土のため、全体の器形を知ることが叶わないが、特殊な器物とみられる。色絵製品としては景德鎮産の古赤絵と呼ばれる16世紀前半から中葉の嘉靖年間頃の皿や、16世紀末から17世紀前半に位置付けられる漳州窯産の色絵鉢等が確認された。陶器では、華南三彩の皿も確認した(図5-3)。素地に白泥をかけ、その上に紫・緑・黄色で彩色を施し、見込には陰刻で蓮池

水禽を表す。16世紀後半から17世紀初頭頃のものと考えられる。また褐釉陶器印花文蓋の外面は褐釉地に印花文で吉祥文が施され、内面には調整痕の叩き目がはっきり残る。他地域での出土事例が少なく、日本では堺環濠都市遺跡（SKT263）出土の1破片（堺市立埋蔵文化財センター2004）などが知られる。土器は粗製のものから上質なものまで多くのバリエーションが認められたが、特筆されるのはタイ産の黒色磨研土器のケンディの注口部分である（図5-2）。日本では長崎の築町遺跡などで出土例がある（長崎市教育委員会1997）。

当地点出土陶磁器の年代観は、16世紀前半から中頃のグループと、16世紀後半から17世紀前半に比定されるグループを確認したが、第2層と第3層とにまたがって検出され、一連の活動の中で形成されたと考えられた。この年代観は、一点の疑問を想起させる。王朝年代記で唱えられてきた1594年のアユタヤ王朝のナレースエン王によるロンヴェーク攻略に関連するような明瞭な画期を当トレンチから見出すことができなかつたのである。少なくとも当トレンチからは、明らかな焼土層や武具・人骨の類が検出されることは一切なく、また16世紀末で途端に文化層が途絶えるような事象も確認することができなかつた。少なくとも陶磁器からは17世紀前半までを中心とするまとまった量の遺物が出土し、数点のみ18世紀に入る徳化窯系の青花が上層である第1層から確認されていることから、1594年にアユタヤによりロンヴェークが攻略されたという記録が事実であったとしても、当トレンチ出土陶磁器の年代観とは厳密には合致しないことが明らかになつた。

2 ワット・トロラエン・カエン

ワット・トロラエン・カエンはロンヴェークの中心からやや東寄りの地点に位置している（図2）。ワット・トロラエン・カエンでは計4点の碑文が発見されており、7世紀（K.137、K.766）、9世紀（K.432）、11世紀（K.136）を示す。さらには、本堂の東面にはネアック・ター・トマリアチアと呼ばれるネアック・ター（祖靈神）の祠が設けられているが、この像は元々ドヴァーラヴァティー様式の倚像であることが明らかになつた（Rivere2016）。本堂の南には小高い丘状に盛り上がつた地点があり、ここには砂岩製のアンコール期に属する屋根装飾が見られる。

ワット・トロラエン・カエンでは、近現代に入り改変が続けられ、現在でも年々境内が拡張し続けている。境内の南端に寺院によって近年に掘削された水路があり、この水路の断面には多くの陶磁器の堆積が露出していた。このため、この水路をトレンチと見なし、断面の陶磁器を採集した。当トレンチから出土した遺物は磁器55点、陶器22点、土器58点である。特筆されるのは当トレンチから出土した貿易陶磁の殆どは中国陶磁であったが、肥前陶磁が4点確認されたことである。1650年代から1670年代に位置付けられる肥前染付の荒磯文碗に加え、特徴的なところとして17世紀第3四半期頃の肥前の鉄釉瓶の底部片が

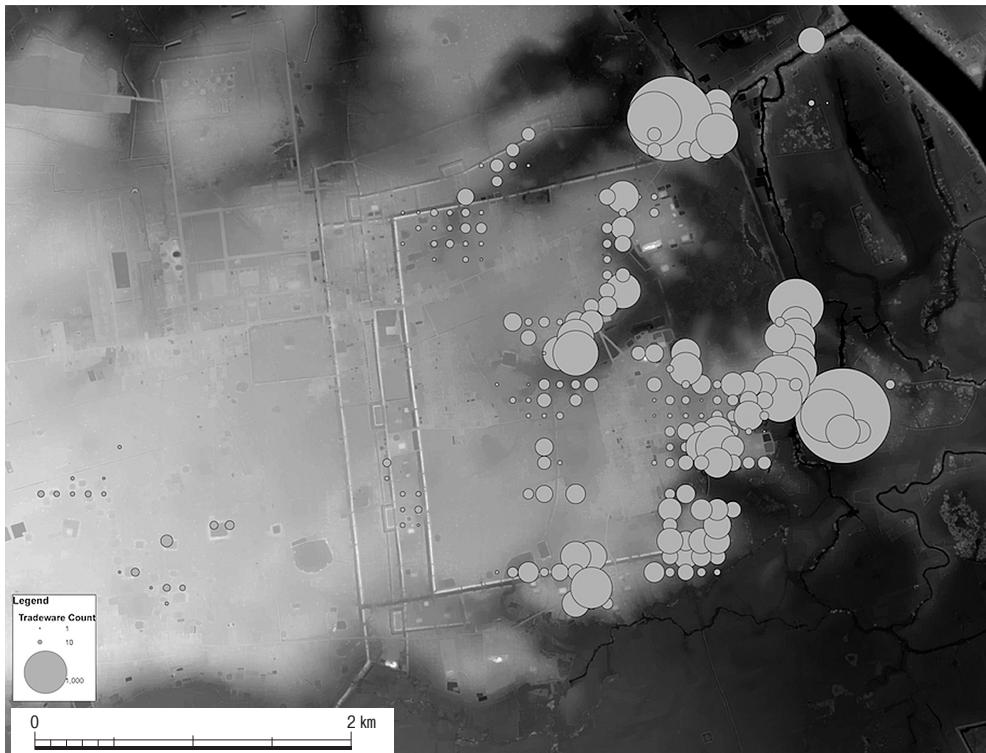


図6 ロンヴェーク表採遺物分布密度

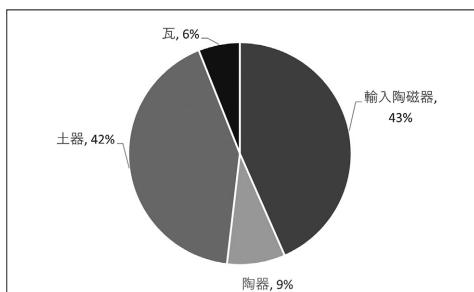


図7 ロンヴェーク表採遺物種類別統計

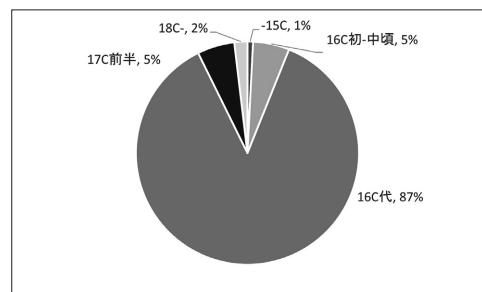


図8 ロンヴェーク表採遺物年代観

出土した。中国青花は16世紀初頭から中頃にかけての碁笥底小皿や連子碗に加え、16世紀後半から17世紀前半頃の景德鎮青花碗、漳州窯青花等が確認された。またクメール黒褐釉陶器壺片も共伴している。

当トレンチ出土遺物の年代観は16世紀初頭から中頃にかけてのものを含みながら、17世紀前半に及ぶものがその中心である。一方、17世紀後半から18世紀初頭にかけての遺物が一定量出土していることが大きな特徴である。前項にあげた中央地点トレンチからは肥前をはじめとした17世紀後半に位置付けられる遺物が一切出土しなかった事実とは対照的である。また、当トレンチからも明らかな焼土層や武器・人骨類は出土しなかった。

3 ロンヴェーク域内表採遺物

ロンヴェークでは踏査によって多くの遺物が地表面上で確認された。ロンヴェーク域内において遺物表面採集調査をおこない、約35,000点にのぼる遺物を採集した。このうち、輸入陶磁器は全体の43%を占め、土器は42%、陶器9%であった(図8)。ロンヴェーク域内での表採量は一定ではなく、遺物の分布密度に偏りがあることが判明した(図6)。遺物分布密度が高いのは、以下の地域であった。

- ①プレーク・ロンヴェーク(ロンヴェーク水路)
- ②トゥオル・バイ・カエク
- ③ロンヴェーク南縁と東縁
- ④ロンヴェーク中央部

前述の通り、ロンヴェーク台地とトンレサップ川とをつなぐ経路は、ロンヴェーク北東側に位置する直線的なプレーク・ロンヴェークと、そこからロンヴェークの台地に沿って南下する水路網である。①のプレーク・ロンヴェークからロンヴェーク域内への入り口付近には、多くの遺物が発見されている。トンレサップ川を遡上した大型船からプレーク・ロンヴェークを渡る小型舟に積み替え、ロンヴェーク台地に荷揚げした可能性を示唆するものである。一方、南側へ延伸する水路網はロンヴェーク台地下の東側に位置する②のトゥオル・バイ・カエクと呼ばれる島状の地域を囲むように巡り、ロンヴェーク台地下へと続く。このトゥオル・バイ・カエクでは、大量の輸入陶磁器を地表面から採集することができた。おそらく、当地点はロンヴェークに物資を運ぶための中継地点のような役割を果たしていたのではないかと考えられる。

③のロンヴェーク南縁と東縁に関連し、注目したいのがプレー・アン・テープ東の地点である。水路が最もロンヴェーク台地寄りに位置し、船着場のように台地上に上がることができる緩やかな傾斜地となっている。実際、現地を踏査した際、村人の丸木舟が着岸している状況を確認した。現在でも雨季を中心に台地下の低地帯を小舟で往来しているのである。当地区周辺を踏査すると夥しい数の陶磁器片が地表面上に落ちていることが確認で

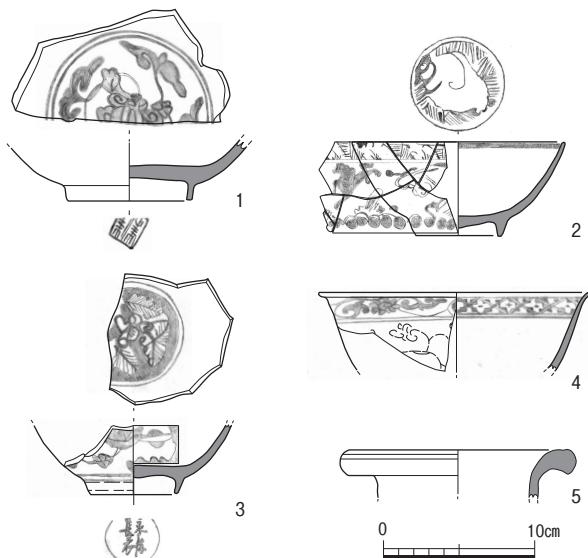


図9 ロンヴェーク表採遺物

きる。その陶磁器の年代観は16世紀中頃から17世紀前半のもので、まさにロンヴェーク期にあたる時代の遺物であった。トンレサップ川、水路を経由してもたらされた陶磁器を含めた品々の荷揚げ場所の一つであったのであろう。このようにロンヴェークの遺物表採調査で遺物分布密度が高かった地点のうち、①から③はロンヴェークの商業都市としての機能に関連する地点であった。

一方、④は前述のレンガ工場地区、中心寺院ワット・トロラエン・カエンを含むロンヴェーク中央部である。当地域は、その立地からロンヴェークの中でも重要な役割を持っていたものと推測されていた。上の貿易に関連するとみられる3地点よりは遺物の分布密度が落ちるもの、そのほかの地域に比べて比較的多い量の遺物が確認されている。

4 ロンヴェーク出土陶磁器の検討

ロンヴェーク中央地点出土陶磁器の年代観は、16世紀初頭から中頃のグループと、16世紀後半から17世紀前半に比定されるグループにほぼまとまるることを確認した。一方、ワット・トロラエン・カエンのトレーニ出土遺物は、中央地点と同様に16世紀初頭から中頃のグループと、16世紀後半から17世紀前半までのグループが主体でありながらも、17世紀後半に比定される肥前磁器や18世紀の中国青花を確認する等、中央地点より下る時代まで確認できた。表採陶磁器のうち現時点までに整理作業を終えている2363点に対し年代比定をおこなったところ、やはり16世紀初頭から中頃までのグループと、16世紀後半から17世紀前半のグループが主体、わずかに17世紀後半以降のグループが確認された（図7）。

このように、ロンヴェークから出土した貿易陶磁器は16世紀初頭から中頃のグループにはじまり、16世紀後半から17世紀前半にかけて遺物の出土量はピークを迎える、ワット・トロラエン・カエンを含む一部地域で17世紀後半以降の遺物が出土したこととなる。王朝年代記によれば、1594年にアユタヤによりロンヴェークは陥落し、都は遷されたということだが、本稿での分析の結果、少なくとも17世紀前半期までは多くの遺物が出土していることから、王朝年代記のロンヴェーク陥落年代が仮に正しい場合でも、陥落後もロンヴェークは17世紀前半頃まで使われていたことが指摘できよう。

V ロンヴェーク時代の対外貿易

1 史料からの検討

王朝年代記にはカンボジアによる貿易活動に関する記録は残されていない。しかしながら、外国による史料には少ないながらも16世紀カンボジアに関する記録が残されている。

ヨーロッパによる記録 交易の時代（Reid 1988）を迎えた15世紀以降、アジア海域にポル

トガル船や遅れてスペイン船が登場するようになった。彼らが残した記録には、当時の東南アジアについても記載されている。ヨーロッパ史料にはじめてカンボジアが登場するのはトメ・ピレスの『東方諸国記』である（ピレス1966）。1510年代、ピレスは実際にカンボジアを訪れるることはなかったが、伝え聞くところとして、「カンボジアの国土は多くの米と良い肉、魚、地酒を産する。そして、この国には金がある。そして、漆、多くの象牙、干魚、米を産出する。そしてベンガル産の良質な白服、少しの胡椒、丁字、辰砂、水銀、蘇合香、赤真珠等…（中略）である。」1555年にはポルトガル人宣教師ガスパール・ダ・クルスがロンヴェークに滞在する（クルス著・日埜編訳1996）。その後、16世紀末から17世紀にかけてはスペインとポルトガルの宣教師や商人たちがカンボジアに滞在するようになったとみられる。しかしながら、17世紀代のオランダ東インド会社の登場まで、カンボジアとヨーロッパ諸国との貿易品目に関する記録は今のところ殆ど見つかっていない。

日本による記録 1569（永禄12）年、九州の沿岸にカンボジアの船が漂着した（岡本1942）。靈雲院に蔵される『頌詩』には大友氏とカンボジアの関係性を証明する書簡が2点書き写されている（鹿毛2011、2012）。1点目は1579（天正7）年に金書と献物を携えて豊後に向かったとみられるカンボジア船が薩摩に漂着したことを受け、島津義久が「南蛮国甘埔寨賢主君」に宛てた書簡である。そしてもう1通はその返信書簡とも受け取れる、「甘埔寨浮喇哈力汪加」から大友氏宛に送られた書簡である。この書簡には象、象簡、鏡匠、銅銃一門、蜂蟬三百斤を贈る旨が書かれる。この「浮喇哈力汪加」という名前は「プレア・リアチア（Preah Reachea）」という王に付く敬称であると考えられる。王朝年代記の年代が正しければ、バロム・リアチア王（1566-1579）やサター王（1579-1595）の時代で、まさにロンヴェーク期である。カンボジア国王が、遠く日本の大友氏と直接交渉をし、交流をおこなっていたことは注目すべき事案である。

朱印船・唐船貿易が盛んとなる17世紀に入ると、当該期カンボジアと日本間の貿易関連史料が増加する。1604（慶長9）年から1635（寛永12）年までに、カンボジアへ渡航した朱印船は44隻、鎖国令発布以降は唐船による貿易が活発となり、カンボジア船として記載されるのは1641（寛永18）年7月3日から1745（延享2）年4月1日までの41隻である。日本とカンボジア間で展開された唐船貿易による主なカンボジアの輸出品目は鹿皮、蘇木、砂糖、そして漆である（永積1987、佐藤2009、北川2015）。一方、朱印船貿易開始以前である16世紀代における対日本貿易の具体的な取引品目は残念ながら現段階では示すことができない。ただ、17世紀に入った直後の1604年に5隻もの朱印船がカンボジアへ渡航していることを鑑みると、16世紀代後半には既に日本一カンボジア間の貿易活動が執り行われていたことが推察される。

2 考古資料からの検討

豊富な量の陶磁器 上述したように、カンボジア唯一の年代記である王朝年代記は後世に編纂されたもので同時代史料とはなりえない。さらに16世紀代の史料に関しては、貿易品目を具体的に記載するようなカンボジア側の史料は残念ながら残っておらず、ポルトガルやスペインの宣教師・冒険家による記録、また大友氏との書簡が貴重な同時代史料となっている。カンボジアに関する貿易史料は、17世紀に入ってのオランダ東インド会社、また日本による朱印船・唐船貿易の記録の登場を待たねばならない。一方、遺跡から出土する考古資料は史料不足を補い、16世紀におこなわれた貿易をモノの形で証明してくれる。ロンヴェークに関しては、発掘調査、表採調査双方から非常に豊富な量の陶磁器が確認されたのは前述した通りである。実際に多くの貿易陶磁器がロンヴェークから出土したことは、少なくとも当該期カンボジアが中国等諸外国から陶磁器を輸入していたことの証拠であることは明らかである。とりわけ、中央地点出土遺物に見るよう高級品や特殊遺物も確認されたことは特筆される。上質な景德鎮産青花や白磁特殊容器、吉祥文蓋付褐釉壺等は、おそらくは一般階級の居住域に属するものではなく、王族や高位官僚等一定以上のステータスを持つ階級に属するものであったと考えられる。これはすなわち、当該期ロンヴェークが相応の財力を有し、積極的に貿易活動を行っていたこと示唆している。

ロンヴェークにおける容器としての陶磁器として、一般的に利用されていたと考えられるのが、最も大量に出土している土器である。容器としての土器として重要な発見例の一つに、ロンヴェーク中央地点で過去に出土した内面に黒色の漆が付着した在地土器の丸底壺片がある（佐藤2016）。このような漆付着土器は多くはないがこれまでに20点ほど出土している。上述の通り、日本にとって17世紀以降の主要な漆の輸入先の一つがカンボジアであった。16世紀にカンボジアが漆を輸出していたか否かについて文献上からは現段階で述べることはできない。今回ロンヴェークから出土したこの漆付着土器は、地元または短距離圏内で使用するためのもので、長距離輸送用の容器ではない可能性もあるが、いずれにしても今後は漆等を入れる容器としての土器に留意しながら調査を進める必要がある。

VII 考 察

本稿では、衰退の時代と考えられていたポスト・アンコール期の王都ロンヴェークにおいて豊富な量の貿易陶磁器を検出し、それらの貿易陶磁器が主に16世紀から17世紀前半までの時間幅を持つことを明らかにした。16世紀にカンボジアはヨーロッパと接触し、さらには日本との交渉をおこなう等、積極的な外交展開をしていたことが史料から判明した一方、具体的な貿易品に関しては史料からは見出す事が出来なかった。ここでは、出土貿易

陶磁器群からみた当該期カンボジアの対外貿易活動について考察したい。

1 港市としてのロンヴェーク

前章まででロンヴェーク表採遺物では、プレーク・ロンヴェーク、トゥオル・バイ・カエク、東辺、南辺土塁周辺などで遺物量が相対的に多かったことを指摘した。ここでLidarによる地形図を今一度検討したい（図2）。ロンヴェーク南辺土塁東端部からプレーク・アン・テープにかけての地区は、台地の末端部にあたり、リアス式海岸のように入り組んだ地形を呈している。乾季には台地下の部分は水が殆ど引き、雨季にはこの台地の縁まで水位が上がる。さらに、コンポン・ロンヴェークから続く水路はロンヴェークの台地を巡るように張り巡らされている。1555年から1557年にかけてキリスト教布教のためにカンボジアに滞在したガスパール・ダ・クルスによれば、

「ポルトガル人たちは、ロエクにおいて、野原の中の非常に高い盛り土を私に示した。その盛り土の上で、彼らは次のように確言したのである。増水の時期にはこの地で作られた船一隻が（この盛り土に）触れることなく通過していたものだ。その船たるやインディアからポルトガルまですら立派に航行できようかと思われたほどだ、と。」（クルス著・日埜編訳1996）。

これはすなわち、雨季には外洋を航海できる規模の大型船がトンレサップ川を遡上しロンヴェークの地までたどり着いていたということを示唆している。おそらくこのようなトンレサップ川を遡上した大型の貿易船から荷下ろしされた品々を小船に載せてプレーク・ロンヴェークそして台地の縁を巡る水路を使い、台地北東部、東縁や南縁からロンヴェーク内に荷揚げしていたのであろう。今後、更なる調査が求められるが、地の利を存分に生かし、ロンヴェークは外国との貿易を拡大させたことが伺えよう。

2 ロンヴェークからウドンへ

さて、上述のヨーロッパ史料でも取り上げたが、ロンヴェーク期にはポルトガル人をはじめとしたヨーロッパ人宣教師がカンボジアに滞在したが、当時は外国人居留区という明確な区分が存在したという記録は見当たらない。カンボジア王朝年代記によれば1594年にアユタヤの攻撃によりロンヴェークは陥落、王はスレイ・サントーに逃れ、1620年になりチエイ・チエッタ王がロンヴェークのすぐ南約3kmのウドンに遷都したとされる。17世紀前半にはウドンから程近いトンレサップ川沿いのポニヤ・ルー地域に前後10kmにわたり日本人、ポルトガル人、中国人、コーチシナ人とカンボジア人の町が発達していたとされ、1618年には日本人キリシタン70名が既に教会堂を建設していたという（岩生1966）。これはすなわち、王朝年代記が述べるところの1620年ウドン遷都に至るまでの間に、ポニヤ・

ルー地域が外国人居留地となり、ここで諸外国人が貿易業を営んでいたということになる。ロンヴェーク陥落ののちも、この地で対外貿易が継続し、外国人居留地を設けるほど盛んに貿易が行われたことを示唆している。

図2の下端付近でトンレサップ川と合流する川はストゥン・クラン・ポンレイと呼ばれおり、ここから南側にかけてが外国人居留地であるボニヤ・ルー地域とされる。この川はプレーク・ロンヴェークと同様、河口から数100mは明瞭に直線的であり、人工的に流路が改変された可能性がある。川幅は35mほどあり雨季には深度も増すことから小型船で西に進めば、17世紀以降の王都ウドン地域に辿り着く。実際、ストゥン・クラン・ポンレイ周辺では、17世紀以降の貿易陶磁器が採集されている（奈文研2008）。

16世紀はコンポン・ロンヴェークから直接またはロンヴェーク台地下に張り巡らした水路を利用し、貿易品を荷揚した。つまり、ロンヴェークが都と貿易窓口を兼ねていたと言える。一方、17世紀後半以降はボニヤ・ルー地域へと貿易窓口が南下した。トンレサップ川を遡上した各国の大型船は、貿易品を外国人居留区であるボニヤ・ルーで積み替え、ストゥン・クラン・ポンレイ沿いに王都ウドンに物資を運び入れる構造に変化した可能性を提起できる。

3 結 語

ロンヴェーク地域のLidar測量と地形画像解析とその成果に基づいた発掘調査により、謎に包まれていたロンヴェークの様相が徐々に明らかとなった。アンコールが多くの石造建造物を要する宗教都市の様相が強かったのに対し、アンコール陥落から約100年後に造営されたとみられるロンヴェークでは対外貿易を積極的におこなう経済都市としての機能を強めている様相を確認する事が出来た。

ロンヴェークはメコンデルタのある海岸線から200km内陸にあり、一見、対外貿易には不利に見えるが、上述の通り、外洋を航海する大型船はメコン川とトンレサップ川を遡上し、直接ロンヴェークのあるトンレサップ川西岸に到着することができた。15世紀以降に世界的に展開された交易の時代の流れにうまく乗り、16世紀にロンヴェークは豊富な陶磁器を輸入しうるだけの財政力を備え、日本の九州まで王の書簡を携え、船を派遣するほどに積極的な外交を展開していたことが判明した。今後、より具体的なロンヴェークの実像を把握するため、さらなる実証的な調査を進めていく予定である。

参考文献

- Aymonier, É., 1900. *Le Cambodge, I. Le Royaume Actuel*. Paris: Ernest Leroux.
 Boisselier, J., 1965. Récentes recherches archéologiques en Thaïlande. Rapport préliminaire de mission (25 juillet-28 novembre 1964). *Arts Asiatiques* 12, 125-74.

- Chandler, D.P., 1983. *A History of Cambodia*. 1st edition. Boulder (CO) : Westview.
- Cœdès, G. 1942 *Inscriptions du Cambodge II*. EFEO, Paris.
- Cœdès, G. 1954 *Inscriptions du Cambodge VI*. EFEO, Paris.
- Garnier, F., 1871. Chronique royale du Cambodge. *Journal Asiatique*, 6(18), 336–85.
- Garnier, F., 1872. Chronique royale du Cambodge. *Journal Asiatique*, 6(20), 112–44.
- Gaucher, J., 2004. Angkor Thom, une utopie réalisée? Structuration de l'espace et modèle indien d'urbanisme dans le Cambodge ancien. *Arts asiatiques* 59: 58–86.
- Giteau, M., 1975. *Iconographie du Cambodge Post-Angkorien*. Paris: École française d'Extrême-Orient.
- Khin, S., 1988. *Chroniques royales du Cambodge (de 1417 à 1595)*. Paris: École française d'Extrême-Orient.
- Leclère, A., 1914. *Histoire du Cambodge depuis le 1er siècle de notre ère, d'après les inscriptions lapidaires, les annales chinoises et annamites et les documents européens des six derniers siècles*. Paris: Paul Geuthner.
- Mak, P., 1984. *Chroniques royales du Cambodge (des origines légendaires jusqu'à Paramarājā Ier Traduction française avec comparaison des différentes versions et introduction*. Paris: École française d'Extrême-Orient.
- Mikaelian, G., 2013. Des sources lacunaires de l'histoire à l'histoire complexifiée des sources. Éléments pour une histoire des renaissances khmères (c. XIVe-c. XVIIIe s.). *Péninsule*, 65(2), 259–304.
- Moura, J., 1883. *Le royaume du Cambodge*. Paris: Ernest Leroux.
- Reid, A. 1988. *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450–1680. Vol. 1: The Lands Below the Winds*. New Haven (CT) : Yale University Press.
- Revire, N., 2016. « L'habit ne fait pas le moine » : note sur un Buddha préangkorien sis à Longvek (Cambodge) et accoutré en Neak Ta. *Arts asiatiques* 71, 159–66.
- Thompson, A., 2000. Lost and Found: the stupa, the four-faced Buddha and the seat of Royal power in Middle Cambodia, in Southeast Asian Archaeology: *Proceedings of the 7th International Conference of the European Association of Southeast Asian Archaeologists*, 1998, Berlin, eds. W. Lobo & S. Reiman. Hull: Centre for Southeast Asian Studies, Berlin: Ethnologisches Museum, 245–64.
- Vickery, M., 1977a (annot. 2012). 'Cambodia After Angkor: The Chroniclar Evidence for the Fourteenth to Sixteenth Centuries'. PhD thesis, University of Michigan, Ann Arbor.
- Vickery, M., 1977b. The 2 / k.125 Fragment, a Lost Chronicle of Ayutthaya. *Journal of the Siam Society* 65(1), 1–80.
- Vickery, M., 2004. Cambodia and Its Neighbours in the 15th Century. Asia Research Institute Working Paper No. 27, Asia Research Institute, National University of Singapore, viewed 01 June 2013, <<https://ari.nus.edu.sg/publications/wps-27-cambodia-and-its-neighbors-in-the-15th-century/>>.
- Wade, G., 2005. Southeast Asia in the Ming Shi-lu: an open access resource. Asia Research Institute and the Singapore E-Press, National University of Singapore, viewed 01 July 2017, <<http://epress.nus.edu.sg/msl/>>

- Wade, G., 2011. 'Angkor and its External Relations in the 14th–15th Centuries as Reflected in the Ming Shi-lu', paper presented to the International Conference on Angkor and Its Global Connections, Siem Reap, 10th – 11th June 2011.
- Wolters, O.W., 1966. The Khmer King at Basan (1371–3) and the Restoration of the Cambodian Chronology During the Fourteenth and Fifteenth Centuries. *Asia Major* 12(1), 44–89.
- 岩生成一 1966 『南洋日本町の研究』 岩波書店
- 岡本良知 1942 『十六世紀日歐交通史の研究』 六甲書房
- ガスパール・ダ・クルス著 日埜博司編訳 1996 『中国誌』 講談社
- 鹿毛敏夫 2011 「日本「九州大邦主」大友氏と中国舟山島」『アジア戦国大名大友氏の研究』 吉川弘文館 pp.174–187
- 鹿毛敏夫 2012 「戦国大名の海洋活動と東南アジア交易」『交易陶磁研究』 pp.23–33
- 北川香子 1998 「ポスト・アンコールの王城—ロンヴェークおよびウドン調査報告—」『東南アジア歴史と文化』 27 pp.48–72
- 北川香子 2006 『カンボジア史再考』 連合出版
- 北川香子 2015 「ヨーロッパの船が河を遡ってきた頃—17世紀カンボジア史再考—」『南方文化』 第四一輯
- 堺市立埋蔵文化財センター 2004 『堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告：SKT263・甲斐町東二丁』
- 佐藤由似 2009 「ポスト・アンコール期カンボジアにおける陶磁器流通—ポニヤ・ルー地域出土陶磁器の組成分析をもとに—」『東南アジア考古学』 29 pp.13–22
- 佐藤由似 2012 「クラン・コー遺跡検出墓壙と出土遺物の検討」『東南アジア考古学』 32 pp.61–73
- 佐藤由似 2016 「中近世カンボジア王都周辺地域における陶磁器の需要と流通」『陶磁器の考古学』 第4巻 pp.207–228
- 中央研究院歴史語言研究所漢籍電子文献『明實錄、朝鮮王實錄、清實錄資料庫』 <http://hanchi.ihp.sinica.edu.tw/mql/login.html>
- トメ・ピレス著、生田滋ほか訳注 1966 『東方諸国記』 岩波書店
- 長崎市教育委員会 1997 『築町遺跡：築町別館跡地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 永積洋子 1987 『唐船輸出入品数量一覧 一六三七—一八三三年』 創文社
- 奈良文化財研究所 2008 『カンボジアにおける中世遺跡と日本人町の研究』
- 奈良文化財研究所 2015 『ポスト・アンコール期遺跡に関する研究報告書』
- 山脇悌二郎 1988 「交易篇—唐・蘭船の伊万里焼輸出—」『有田町史商業編 I』 有田町史編纂委員会 pp.265–410

挿図出典

図1：arc gisをもとに筆者作成

図2、3、6：Cambodian Archaeological Lidar Initiativeによる測量図を基に筆者加筆

図4：Cambodian Archaeological Lidar Initiativeによる測量データを基に原口強・千葉達郎により作成された赤色立体地図を筆者加工

図5、7、8、9：筆者作成